

平成 29 年度 研究成果報告書

Research Achievement Report FY2017

講座名・職名 Course Title・Job Title	ヨーロッパ I ・教授
氏名 Name	早稲田 みか
専門分野 Academic Field	ハンガリー語学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	ハンガリー語動詞接頭辞の多義構造にみられる文法化と活性化
ハンガリー語の動詞接頭辞は、「上へ」「下へ」など、空間移動の方向を表す基本的（語彙的）意味をもつが、動詞に接続し、様々な抽象的意味や、文法化して完了アスペクト（文法的意味）を表したりする。この文法化した動詞接頭辞の用法には、完了アスペクト付与だけでは説明できない意味の差異や、微妙なニュアンスがある。こうした意味の差異は、文法化した動詞接頭辞が完全に語彙的意味を失ってはならず、本来の語彙的意味が活性化されることにより生じると仮定し、この仮説を検証し、文法化と活性化により多義性が生じるメカニズムを明らかにすることを試みた。 具体的にはハンガリー科学アカデミー言語学研究所の言語コーパスや文学テキストを利用して、基動詞のアスペクト意味を考慮しながら、完了の機能を付加する接頭辞 <i>meg</i> および <i>el</i> が接続している用例を、コンテキストがわかるようにかたちで収集し、意味の差異を分析した。 その結果、完了アスペクト付与だけでは説明できない意味の差異をもつ基動詞は、Vendler (1967) による動詞のアスペクト分類において「到達動詞 (Achievements)」と呼ばれる動詞クラスに特徴的にみられることが明らかとなった。到達動詞はそもそも完了的な事象を表すことから、これにさらに完了アスペクトを付与してもアスペクト的にはかわらず、ちがいを説明できないからである。これに対し、達成動詞も同様に完了的な事象を表すが、状態変化の事象を表すため、完了アスペクトの付与により、状態変化が完了するという新たな意味になりうる。以上のことから、到達動詞についてさらなる考察が必要であることがわかり、今後の研究の進め方の指針が得られた。	